

「コロラド号」の航跡

明治四年の野球試合

ベースボールが、日本へ伝えられたのは、いつのことだろう。

野球史研究の先駆者・齋藤三郎によると、それは、一八七二（明治五）年のことである。

齋藤は、それまでの曖昧な言い伝えではなく、書き残された資料によって、日本人が国内で初めてプレーした時期を証明した。

けれども、外国人同士のゲームとなると、さらにその一年前の、一八七一年に行われていた。この埋もれていた事実が知られたのは、一九八八（昭和六三）年であった。

ある新聞に『初の野球試合は明治四年 横浜』の見出しで、『横浜の外国人居留民と、貨客船「コロラド号」の船員との間で、同年十月二十日の土曜日に行われた』という記事

が掲載けいさいされている。

ここでは、その試合しあいに参加さんかした人達ひとたちを乗せた「コロラド号」を追いながら、日本の空そらに初めて白球はつきゅうが飛んだ日ひについて検討けんとうしてみたい。

軍艦「コロラド号」

さて、前述ぜんじゆつの新聞記事しんぶんきじには、貨客船「コロラド号」とある。この優雅ゆうがで、希望きぼうに満ちた船旅ふなたびを連想れんそうさせる船の名なは、サンフランシスコと上海シャンハイをむすぶ北太平洋定期航路きたたいへいようていきこうろの第一便だいいびんとして有名ゆうめいな民間会社みんかんがいしやの「コロラド号」をさしているのであろう。

けれども、調べてみると、そのゲームが行われた一八七一年に日本へ来ていた「コロラド号」は、アメリカ海軍かいぐんの「軍艦」であった。民間会社の貨客船「コロラド号」は、その年には一度も日本へたちよつていなかった。

軍艦「コロラド号」は、船首せんしゆの部分ぶぶんに大きい槍やりのような飾りかざり(バウスプリット)があり、昔むかしながらの二本ぼんのマストをもつ。その頃のアメリカ海軍アジア艦隊かいたいのなかでも、最大さいだいのスクリーナー式フリゲート艦しきかんである。全長ぜんちようは八〇・三七メートル、船幅ふなば十六メートル、排水量はいすいりようは

三、四二五トン、八〇〇馬力、最大速力は、九キロノット。しかも、四五門の大砲を装備していた。当時の日本の指導者達からみれば、強く美しい完璧な軍艦であった。

「コロラド号」は、一八五八年から一八八五年までカリブ海やニューヨーク、あるいは、ヨーロッパなど世界各地で任務についている。とくにアジア艦隊に所属していた一八七一年の朝鮮での戦い（辛未洋擾）では、中心的な役割を果たしていた。

この戦いは「韓米戦争」とも呼ばれ、東アジア近代史でも重要な事件とされている。そして、この戦争が、日本野球史上の記念すべき試合となった横浜でのゲームの遠因にもなっていた。「コロラド号」の航跡を追ってみよう。

韓米戦争（辛未洋擾）

一八七〇年の四月にニューヨークを出発した「コロラド号」が、ロンドンやシンガポールなどを経由して上海へ到着したのは、その年の九月である。

その後、朝鮮へ開国をせまるための遠征計画が正式に決定された。そして、十二月下旬には、遠征の準備のために長崎を訪れる。

また、翌年の初めには長崎から神戸・長崎・香港とあわただしく各地をめぐる。さらに、四月上旬から上海近郊で遠征の最終的な用意をととのえ、一八七一年五月に長崎へ再び姿をあらわした。

当時の新聞によると、「コロラド号」の乗員は、七〇〇人。他の四隻（「アラスカ号」、「ベニシア号」、「モノカシイ号」、「パロス号」）とあわせて、総員一、四八五名の遠征隊の旗艦として、五月十六日に朝鮮へむけ出港する。

艦隊は、島々の間を測量しながら進み、やがて朝鮮の首都をうかがう江華島にほど近い場所へ碇をおろし交渉にのぞんだ。そして、五月二十と三二の両日「コロラド号」を訪ねた朝鮮側の使者に対して、アメリカは高級官僚との交渉を要求する。また、六月一日からは、周辺の測量を開始するとも通告した。

遠征隊は、予告どおり測量を名目に朝鮮領内に深く侵入していった。そこは、朝鮮側にとつて、防衛上の最重要地点でもある。たちまち砲弾の飛びかう戦場となり、これをきつかけにアメリカの武力行使がはじまった。

六月十日、アメリカは海上からの擁護砲撃のもと江華島に上陸する。朝鮮側は、槍や

刀が折れてもたちむかい、敵の眼に土を投げつけるなどして最後まで戦った。けれども、守りの拠点ともなる砲台は次々と破壊され、翌日には最大の要塞も制圧されてしまう。

この二日間の激戦で、朝鮮側では有名な將軍を含む多くの犠牲をだした。

アメリカは、朝鮮側のあまりに凄惨な戦い方に、『(勝つには勝ったが) 誰も記憶したくない勝利』と評したという。

その後も、朝鮮側に話しあいの意志がまったくなく、ことは明白だった。

しかし、アメリカが、さらに大規模な攻撃を行うには、兵力不足でもあった。遠征隊は朝鮮側の態度を非難して、今後アメリカ市民が朝鮮国内で遭難するようなことがあれば、必ず救助・保護するよう一方的な要求をだした。

そして、これ以上の交渉は無理と判断した遠征隊は、七月三日に朝鮮を離れ、二日後に中国の山東省兗州(今の煙台)へ入港する。

これが、「辛未洋擾」とも呼ばれる一八七一年の韓米戦争である。

この四十日間にもおよぶ不毛な戦いは、朝鮮側の多くの重要な施設を破壊した。しかも、犠牲者はアメリカに十数名、朝鮮側には二百人以上にのぼる深刻な被害を残した。

予期せぬ出来事

その後、一カ月あまりを空果ですごした「コロラド号」は、二度目の朝鮮遠征の準備のため、八月上旬に艦隊を離れて日本へむかった。航海の途中は悪天候で、荒れる海に悩まされながらも、船は下関海峡にまでたどりつく。

だが、この海難事故の多発した流れの速い海峡で「コロラド号」は予期せぬ事態におそわれる。浅瀬の大岩に激しく乗りあげ、船体を大きく損傷してしまったのだ。おそらくは、凄まじい衝撃音と共に船は傾き、船員達は大混乱したことだろう。

座礁した「コロラド号」は、救助にかけつけた鹿児島藩の軍艦によって、かろうじて助けられる。そして、傷ついた「コロラド号」が神戸を経て横浜の港へ姿をみせたのは、事故から十日ほどすぎた八月の下旬であった。

当時の日本で大型船の本格的な修理ができたのは、横須賀のドライドックだけである。「コロラド号」の修理は、すぐに手配された。しかし、実際は、約一カ月間も横浜で待たされ、九月二日に横須賀へむかう。修理をおえ横浜に戻ったのは、十月半ばすぎである。

なお、ドック入りする船は、通常でも最小限の人員で目的地まで運ばれる。しかも、その頃の横須賀には、アメリカ軍の宿泊施設がなかったこともあり、「コロラド号」の船員達の多くは、横浜で生活していたと思われる。

最古の野球記事

その頃の横浜は、文明開化の象徴的な街として鉄道や港の整備・新しい土地の開発などが活発に進められていた。外交官や宣教師・貿易商をはじめ千人以上の外国人が住み、さながら西洋の小都市のようでもあった。

横浜に滞在中の「コロラド号」の船員達は、居留民達との交流も深めていった。

それを伝える記事が、『The Japan Weekly Mail (ジャパン・ウィークリー・メール紙)』という英字新聞の一九一一年十一月四日号に残されている。

『ベースボールの試合が、先月三十日の土曜日に、九人の「コロラド号」の水兵と九人のシベリアン(居留民)との間で行われた』

これが、今のところ日本で最古の野球試合として知られているもので、先に述べた一九

八八年の新聞記事の元になった資料である。

従来説の誤り

ところで、このゲームが行われた場所と日付についても、従来からの通説は再検討しなければならぬ。

まず、試合の場所は、当初から今の横浜公園（スタジアム付近）と一般に伝えられている。しかし、横浜公園内のグラウンドは、この年にはまだ工事中であった。

完成したのは、翌年の一八七二年のことである。また、そのゲームの記事をのせた英字新聞にも『スワンプ（沼地地区）で』と書かれている。

このようなことから、本当の試合場所は、横浜公園から少し西より数百メートル離れた、その頃「スワンプ」とよばれる地域にあった「ヨコハマ・クリケット・クラブのグラウンド」（今の横浜市立港中学校のあたり）だと確定できる。

このグラウンドは、一八六八年に、ふたりのイギリス人が海に近い沼地を埋め立てつくったものである。そのため不完全な点もみられたが、球技スポーツ用の本格的なグラウ

ンドとしては、日本で最初のものであった。

それでは、試合の日付についてはどうだろう。これまでは、一八七二年「十月三十日の土曜日」にゲームが行われたとされてきた。

しかし、古い暦をたどってみると、その年の十月三十日は「土曜日」ではなく「月曜日」であった。日付と曜日にくい違いがある。

そこで、この日付と曜日が異なる理由を探るため、もともとの英字新聞を読みかえしてみた。

すると、その記事には、ただ『先月三十日の土曜日』とだけ書かれていた。

三十日が土曜日なのは、その年の暦では、九月と十二月だけである。

試合の記事は、十二月よりも前のものなので、「先月三十日の土曜日」をあてはめるとすれば、該当する日付は、九月三十日しかありえない。

このような考えから様々な資料を検証した結果、日本最古の野球試合は、「一八七二年九月三十日に行われた」とするのが妥当だ、と十年以上も前から提唱してきた。

あら 新たな資料

ところが、二〇二六（平成二八）年の春、思いがけず新たな資料と出会った。

『横浜で初めての野球の試合が先月（十月）二六日に、九人のアメリカ人居留民とアメリカ軍艦「コロラド号」から選ばれた九人との間で行われた』という記事を掲載した一八七一年の『The New York Herald（ニューヨークヘラルド紙）』である。

その内容を横浜の英字新聞と比べると、驚いたことに、試合の日付（二十日と二六日の違い）以外は、ゲーム当日のグラウンド状態や試合結果などほとんど一致していた。

横浜の英字新聞では『とても滑りやすかった』とあるグラウンド状態は『前の二日間ずっと降り続いた大雨の影響で非常に悪いグラウンド状態にもかかわらず、夕闇のために終わるまで双方とも四回ずつのとても上手なゲームがくりひろげられた』とある。

さらに読み進めると、ゲームの結果は、横浜の英字新聞と同様『四回で「コロラド号」チームは十四点、居留民チームは十二点を得て、海軍チームが三点差で勝利した』とあり、最後に『全米野球協会の厳格なルールは適用されなかった』と書かれていた。

つまり、横浜の英字新聞と今回みつけたニューヨークの新聞は、同じ日に行われた同じ

試合のことを伝えていたのである。

これによつて、横浜の英字新聞が『とても滑りやすかった』と記したグラウンドの状態は、『前の二日間ずっと降り続いた大雨』が原因であったことが新たに判明した。そこで、改めて天候面からゲームが行われた日を特定してみたい。

あめ あめ せいてん
雨・雨・晴天

その頃の日本には、まだ気象台もなく公式な記録から試合当日の天気を確認することはできない。また、当時の日本語の新聞には気象欄があったものの、必要とする日の紙面は現存していなかった。しかし、試合が行われた前後の天候を裏付ける資料は残っていた。

それが、『関口日記』である。

せきぐちにつき なまむぎむら いま よこはましつるみくなまむぎ
『関口日記』は、生麦村（今の横浜市鶴見区生麦）で名主をしていた関口家の当主達が、江戸時代から明治期の後半まで、五代にわたり書き続けた日記であった。内容は、日々の天候や日常生活・事件・金銭出納などである。

しあい その生麦村から直線距離で約五キロメートルの近いところで行われていた。

『関口日記』により、九月後半から十月末日までの約四十日間の天気を調べてみると、まず、ひとつめの横浜の英字新聞にある「十月三十日」は、前日から続く「雨天」。予定されていた行事(神楽)が延期されるほどの天気で、野球の試合は不可能だった。

また、新たにみつかった『ニューヨークヘラルド紙』の「十月二十六日」は、「阴天(曇り)」、その前の二日間も「薄晴」で、試合が行われた日の条件と一致しない。

さらに、自説の「九月三十日」は「薄晴」、その前の二日間は「晴天」「阴天」となっていた。

その他の日も同様に調べてみたが、結果として、この期間に二日続きの雨の後に天気が回復したという条件に該当する日は、「十月二日(雨・雨・晴天)」しかなかった。

したがって、日本最古の野球の試合は「一八七二年十月三十一日の火曜日に行われた」と考えるのが妥当だと思われる。

今後の課題としては、なぜ試合の日付が資料により異なるのか。また、両チームの関係者がどのような人達であったのかなど、アメリカ側に残されている資料もふくめて、さらに調べを進める必要がある。

その後の「コロラド号」

傷ついた船体を修復された「コロラド号」は、晩秋になると再び動きはじめていた。

十一月の中旬には、天皇へ着任のあいさつをする上級将校達を乗せ東京にでむく。

下旬には、横浜で仲間の船とボートレースを行ったりもした。

そして、結果的に二度目の遠征はなくなり、「コロラド号」は、十二月七日に横浜をさ

る。長崎を経て、アメリカのアジアでの拠点・上海へ帰還したのは、十二月下旬である。

こうして、三十年近い「コロラド号」の航海のなかで最も困難な一年が過ぎていった。

「コロラド号」の船員達は戦争のため一年以上も母国を離れ、不安と危険と恐怖の連続で

あったことだろう。そんななか、つかの間の休日が日本野球史の冒頭を飾ることになる。

文明は、戦争によって運ばれるとも言いが、皮肉なことに、ベースボールの日本での始

まりも、その頃の緊迫した国際情勢と密接に関係していたのである。

「コロラド号」の選手達は、「滑りやすい」グラウンドにもかかわらず、夕暮れまで洗練

された試合ぶりをみせたという。

おも さんこうぶんけん
主な参考文献

コロラド号の航跡

明治四年の野球試合

『薩藩海軍史』 (公爵島津家編纂所／一九二八から一九二九年)

『朝鮮開國交渉始末』 (奥平武彦／一九二五年)

『近代日鮮関係の研究』 (田保橋潔／一九四〇年)

『日本の野球発達史』 (廣瀬謙三／一九五七年)

『横浜市史』 (横浜市／一九六一年)

『明治天皇紀』 第二 (宮内庁／一九六九年)

『横浜スポーツ草創史』 (山本邦夫・棚田真輔／一九七七年)

『関口日記』 第十七卷 (横浜文化財研究調査会「石井光太郎・内田四方蔵」／一九八一年)

『Historical Dictionary of the United States Navy』 (James Morris・Patricia

M. Kearns／一九九八年)

『旧・横須賀鎮守府&ドライブブック』 (長浜つぐお／一九九八年)

- * 「The Japan Weekly Mail」 「THE HIOGO NEWS」 「THE NAGASAKI EXPRESS」 「The North-China Daily News」 「横濱毎日新聞」などの一八七〇年から一八七二年の各紙各号
- * 「The New York Herald (ニューヨークヘラルド)」(一八七二年二月十八日付 七面)
- * 「読売新聞」 (一九八八年二月三日付 朝刊二七面)

吾二向ヒテ光ル星

野球史探訪 — 明治篇 — より

「コロラド号」の航跡

明治四年の野球試合

二〇一六 (平成二八) 年五月五日 発行

著者 弘田 正典